



究極のグロスとマットを同居させたい

ギラギラするほどに光沢のある金属的な質感の写真と、ラシャ紙のようにマットな色面。1枚の紙に表現された極端に異なるふたつの質感。……見て感じる、触れてもわかるほど極端な質感の差を追求した澤田氏に、今回のトライアルについて話を伺った。

澤田泰廣



——制作コンセプトをお聞かせください

僕がやりたかったことは、1枚の紙の上にグロスとマットという、相対するふたつの質感を同居させることでした。視覚的にはもちろん、触覚として指で触れても明快に認識できるくらい極端な差を演出したかったんです。常識で考えると、これはオフセット印刷では非常に不得手なカテゴリに入るテーマです、通常ならオフセット印刷だけで解決しようとは思わないものなのでしょう。それにあえて挑戦してみたのがこの作品です。

——今回のトライアルで何か発見はありましたか

普段の仕事では保護剤としての用途しか考えていなかったニスを、エンターテインメントの部分で積極的に使用したことです。これまでは機能面のみの消極的な使用例しかなく、どちらかと言うと使いたくなかったものだった脇役を、プリンティングディレクターからの提案もあって、いわば主役として扱おうということになったんです。これが驚くほどの効果をあげてくれました。添加剤を調合するというトライも含め、経験上、理解していた素材や手法でも、このように観点を変えて使用してみると意外な結果を得られることをあらためて実感できました。通常の仕事となると、デザイナーがシミュレーションした完成形をもとに、デザイナーと印刷サイドでノウハウを共有しながら印刷物を完成させていきます。しかし、このトライアルのように、お互いに未知の領域に足を踏み入れながら、実験を試み、ハブニング的に何かが発見できるような体験はやはり楽しかったです。今回の場合だと、Mr.Bとグロスニスのこれしかないという相性が見つかったこととか、樹脂の調合とか、試行錯誤のなかでいろいろな偶然に出会いましたから。僕は「印刷は印刷だ」と考えているんです。紙とインキの関係のなかで、印刷にしか成し得ないベストな効果というものがあるんです。だから原本を完璧に再現することだけが目標ではない。印刷と原本に差が出たとしても、最終的な印刷表現として良い結果が生まれたならば、入稿時のイメージと違いがあっても、僕は積極的にそれを認めたいと常に思っています。

——仕上がりはどうでしたか

満足できる仕上がりになりました。正直なところ、僕はオフセット印刷でここまでグロスとマットの質感の差が表現できるとは思いませんでした。今回、このテーマを選んだきっかけとなったのが、ポスターに使った写真との出会だったんですが、トライアルの話を持ちかけられる前に、たまたまカメラマンの望月孝さんからあの写真を見せてもらったんです。初めて見たとき、水面を撮影したとは思えない、何か金属の塊のような鈍く重たい不思議なメタル感が

強く印象に残りました。以前からテクスチャーには興味があったこともあって、チャンスがあればぜひ印刷を通して形にしたいと考えていたんです。そんな時、タイミングよくこのプロジェクトの話がありました。グロス面の基本ベースとなったこの写真の再現性も相当に高いレベルで表現できたと思っています。

トライアルではグロスとマットの表現のみならず、写真のメタル感の表現も重要なポイントとなった。

澤田氏の今回のクリエイティブに対する姿勢を聞いてみた。

——このトライアルでは、一貫して質感の表現を大切にされているように感じました

僕の仕事はほとんどが最終的には印刷物として完了します。ただし、その過程でのシミュレーションも含めた定着は、現在、モニター上での作業がどうしても中心となりがちです。要するに発光体としての色や形に接する時間が、以前と比べると圧倒的に多くなっているということなんですね。そして、そこには物質感がないわけです。これが僕の場合、フラストレーションになっているのかもしれない。リアリティをもってものをつくる感覚の大切さを知っているだけに、ブツに対する「渴き」みたいなものがきつとあるんだと思います。だからオフセット印刷なのに今回のようなテーマを選んでしまった。要因はそんなところにもあったんじゃないでしょうか。

——周りを見ても質感にこだわったデザインが増えているように思います

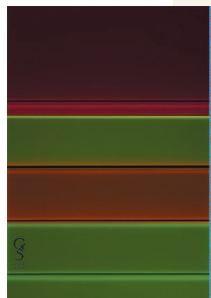
恐らく僕が思っているようなことを、世の中の人もなんとなく同じように感じているんだと思います。普段の生活でも、体感すべきリアリティが便利さと速度のなかでどんどんバーチャル化していることにも関係があると思うんですが……。クリエイターは本能的にそういう変化に敏感ですから、作り手だけの話としてではなく、受け取る側もそういうものを求めているということも早々に察しているんですよ。確かにブックデザインなんかを見ても、ひとつのプロダクトとしてとらえた場合、触覚を強く意識した素晴らしい実験的な仕事も、最近かなり目立っていますよね。社会の流れとはちょっと違う隙間みたいなところに、今、必要とされているデザインのヒントがけっこう隠れているのかもしれない。

——オフセット印刷についてはどう思われますか

単純に、濃度や強さということであればシルクスクリーン印刷や、ことによったらインクジェットの方が勝る場合もあるかもしれませんが、紙とインキの密



GALLERY SUGIE
ポスター



GALLERY SUGIE
ポスター

Works by Sawada Yasuhiro



Graphic Wave 2002
ポスター



コサカ技研
ポスター

着度をもっとも強く感じられるのがオフセット印刷で、適度な厚みと仕上がりの繊細な感覚が僕にはあっています。それと、やはり表現領域の広さと再現性のクオリティがなんといっても魅力ですね。今回のトライアルでは、ニスに主役に物質感の表現に挑戦したわけですが、ベースとなる写真表現がしっかりとしていなければ話にならなかったはずですから……。この質の高さは明らかにオフセット印刷ならではのものとリアルに痛感させられました。

■ スタッフより

ひとことと言えば「紙に勝るマットはない」ことを身をもって経験できたトライアルになりました。マットな表現を探すために行ったテストでは、マットニスやオベークホワイトという通常のインキだけでなく、印刷時の滑りを調整する添加剤や樹脂といった機能系の素材を調合したインキも試しました。その結果、グロス系の紙に対してはマットニスが有効なことがわかりましたが、マット系の紙（ヴァンヌーボ等）では紙地以上のマット表現を見つけることができませんでした。しかしながらこのテストのおかげで、樹脂調合グロスニスとグロスニスの重ね刷りという際立ったグロス表現にたどりつくことができました。最終的には数種類の紙で印刷テストを行い、最もグロス感を表現できるMr.Bを選択しました。

写真の表現については、当初はスミ版を中心にしたトリプルトーンによるアプローチを模索しましたが、写真のなかにある多彩な色調を忠実に表現しなかったのでプロセス4色で製版しました。滑らかなグラデーションと立体感の表現に留意しながら作業をした結果、満足のいく仕上がりとなりました。

ところで、澤田氏の作品にはいくつか見えない部分に工夫をしています。印刷によるベタ面の濃度差を目立たなくするために下地にあらかじめ濃度差をつけた平網を印刷したり、ニスで印刷した文字の視認性を高めるためにニスに微量のインキを調合したり……。メインテーマを完遂するためのこうした「見えないオジャレ」が、作品の完成度を支えることになりました。

極端なグロス表現、
マット表現の追求

軟らかめ



普通



硬め



1 写真の色調を決める

写真を軟らかめ、普通、硬めの3段階の階調（トーン）で製版したテスト刷り。これを元に写真の色調の方向性を決めていった。



極端なマット表現の追求

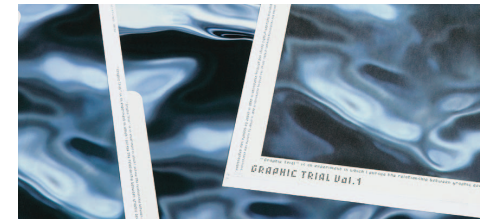
マットニスやオベークホホワイトなどによるカラーチャート。グロス系とマット系の2種類の紙で作成。どの素材の組み合わせが最もマットになるかを比較した。

2

仕上がり直前のデザインで用紙テストを行った。グロス系3種、マット系3種の計6種の紙でテスト刷り。この結果、最もグロス感を表現できたMr.Bを採用することに決まった。

紙を決める

3



4 仕上がり

グロスとマットの表現が随所に盛り込まれた5枚のポスター。写真部分だけでなく、文字部分や色面でもグロスとマットの質感の差が表現されている。





a

- a. b. e. 用紙：Mr.B / ホワイト 四六判 135Kg 版の構成：プロセス4色→マットニス→樹脂調合グロスニス→グロスニス
 c. 用紙：Mr.B / ホワイト 四六判 135Kg 版の構成：プロセス4色→スミ→樹脂調合グロスニス→グロスニス
 d. 用紙：Mr.B / ホワイト 四六判 135Kg 版の構成：プロセス4色→樹脂調合グロスニス→グロスニス→グロスニス(インキ調合)
 ※プロセス4色のK版はすべてマットスミ

写真：望月 孝



b



c



d



e